

東日本大震災3年

「今」

を見つめて (前)

被災地の歯科医として

震災を乗り越えて



高台から臨む女川町。18年に達した津波は市街地の7割を飲み込んだ

東日本大震災から丸3年を控えた2月20・21日、新聞部は被災歯科医師の現状と復興の実態をつかむために、宮城県の東松島市・女川町・亘理町を訪れた。2回にわたってリポートする。

(新聞部)

再開を望む患者のために

東松島市

仙台市から北東へ43キロに位置し、日本三景・松島の一角を占める東松島市。津波で約7割の家屋が全壊し、犠牲者は1千人を超えた。内陸部では住宅展示場のように新築の家が建ち、護岸工事やJR仙石線移設といった復興事業が進む。住宅建築が制限された津波防災区域では荒れ地が広がっている。

診療所を再開して3年に位置し、日本三景・松島の一角を占める東松島市。津波で約7割の家屋が全壊し、犠牲者は1千人を超えた。内陸部では住宅展示場のように新築の家が建ち、護岸工事やJR仙石線移設といった復興事業が進む。住宅建築が制限された津波防災区域では荒れ地が広がっている。



上：震災当時の様子を振り返る五十嵐医師（左端）とスタッフ
下：診療所の被害状況。チェア4台すべてヘドロまみれになった

都府県歯科医師会から支援を受けた健診車で診療しながら作業を続けた。歯科医師会の補助金と借入金を含めて2800万円を投じ、8月に再開。待ちわびたように患者が集まった。「無事で良かった」「綺麗になったね」。励ましの声が何よりうれしかった。「医療人として、原点に立ち返った新鮮な気分だった」

同市を含む石巻管内の歯科医療機関は15%が休止に追い込まれ、鳴瀬でも4カ所のうち2カ所が閉院した。一刻も早い再開を目指し、スタッフと力を合わせ、床下の泥だしやカルテの洗浄に汗を流した。5月以降は京と胸をなで下ろす。

免除措置をめぐる行政の対応は場当たり的だ。半年や1年単位で延長したり、打ち切ったり。患者からは「こんなに大変なのに、なぜ廃止するのか」と口々に聞かされた。地域医療を担う歯科医師として、今、心から訴える。「細切れの支援ではなく、国や自治体は長い目で見て被災者の生活再建を支えてほしい」



左：再建した工場の前で記念撮影
右：ノリ工場を見学する新聞部のメンバー



力合わせノリ工場再建

被災漁業者が連携し、生産組合を設立する動きが広がっている。東松島市では、個人再建を断念した漁業者10人が集まり、組合を発足。行政支援を受け、2012年11月にノリの生産加工工場を完成させた。

組合員の手代木（てしろぎ）浩二さんは「崩壊した港を見てあきらめていたが、力を合わせて再出発することができた」と振り返る。工場は再開したが、漁港は集約化で復旧の見込みが立っていない。それでも、前を向いて懸命に復興を目指す。

同市は、「皇室献上の浜」としてノリの養殖で知られている。品質はお墨付きた。「東松島のノリを安心して食べてほしい」と胸を張った。



左：仮設住宅の集会所でのインタビューの様子
右：陳列された縫いぐるみの「おのくん」



交流広がる手作り人形

小野駅前応急仮設住宅

被災地発のキャラクターが注目を集めている。東松島市の「小野駅前応急仮設住宅」で誕生した手作り人形の「おのくん」だ。

仕掛け人は自治会長の武田文子さん。2年前にボランティアから作り方を教わったのがきっかけだ。「これならできるかも」と住民に呼びかけた。新品の靴下を材料に、制作から販売まで自前で取り組む。今では「おのくん」目当てに多数の人が訪れ、ファンが写真集やポスターまでつくるほどだ。

生活再建は遠いが、先の不安を口にしてもしょうがない。前向きに「おのくん」を通じてたくさんの人と知り合えてうれしい」とほほえむ。

漁業協同組合鳴瀬支所

被災漁業者が連携し、生産組合を設立する動きが広がっている。東松島市では、個人再建を断念した漁業者10人が集まり、組合を発足。行政支援を受け、2012年11月にノリの生産加工工場を完成させた。